大正二年から大正三年　渉　六十六から六十七歳

大正二年一月四日先般来逗留してゐた奈津江が分娩して男子が産れた。是を圭二といふ。同四月十六日山下柳作が死亡した。予て危篤の報があったが折節腰痛を発してゐるので行事を得なかった。惣津の兄に報知した処が兄が広島に渡って山下を訪ふた。同五月十一日てるを伴ひ山下を訪問旁逗留中の秋江母子同伴高浜から宇品に渡し汽車で松原停車場に着し午後二時半の列車に秋江母子を見送り船入村の山下に着した。同十二日電車で己斐に着し汽車に乗替宮島駅から聯絡船で厳島に渡り社参、諸所見物して亀福旅館に一宿同十三日広島に帰り雨中市内を見物して午後一時出船の速見丸で八時前高浜松山を経て帰宅した。

［　省　略　］六月五日四郎が奈津江母子を伴ふて打出に帰った。六月十五日陶[43]半窓翁の四十年祭を彩浜館に執行した。予て宮内六郎右衛門、田中英安両氏と発企人となり門人を始め当郡長警察署長町長小学校長町内有志者等を招待して盛会であった。宴席で記念の撮影した。同十月八日朝出立今治山野へ祭礼に行同十日帰宅。［　省　略　］皇太后崩御四月十二日から三日間廃[44]庁各戸国旗を掲げた。同五月六日から表の尾垂を附替西側の借地に跨りて借家を営む事とし工事を始めた。西側の借家との間は理髪床に構造する事として、六月廿日に至て概略工事を片付て一応大工左官の手を打切、北側の借地と西

『郡中町郷土誌』

43　陶半窓翁…陶惟貞

44　正しくは「廃朝」

側とに垣を設ける等全く工事を竣ったのは十一月中旬であった。七月廿二日旧大洲公の御二男泰俊公が大洲へ見学の途御通行になって彩浜館に休憩になったので、旧藩士と申合せ茶菓を供し余は当[45]町郷土誌を献した。同八月三十一日はるえが打出から昌一を伴ふて帰った。其以来昌一は宅と三谷の村上との間に逗留した。同十月初旬から東京の星製薬会社と特約して売薬を始めた。先頃から独墺両国と英仏露国の間に戦[46]争が始まって我国も英国との同盟によって聯合に加り青島に出戦してゐたのが十一月七日に同地を占領したとの報が達したので、翌八日祝賀提灯行列手踊等で全町賑ふた。

45　郡中町郷土誌

46　第一次世界大戦

大正四年　渉　六十八歳

大正四年三月三日予て町有埋立地西接続弐拾三坪七合六勺北接続地弐拾壱坪四合九勺を借入居たるも、地形の都合により隣地借主から四坪五合六勺を借増した。同月十一日早朝予て近方に別居した兄が急病の様子であるとの報があって直に三郎等と共に駈付た処が知覚が乏しい。藤井氏の診察を請ふて兎も角も宅に引取事として十時過に宅の一室に連帰って看病したが、遂に午後一時五十五分に絶息した。昨晩迄飲食を共にして議員の選挙談をして別れたのであった。折節麟囿氏も帰ったゐたので藤井氏と共に診察したのであったが、全く脳溢血症との(ママ)で事である。同十二日午後四時出棺上行寺に埋葬した。予て山下秀吉妻に仲田定代女を媒して同四月十三日仲田得次郎氏父子同伴広島に行同夜山下で婚姻の祝儀を済した。同十四日仲田氏同伴市中見物当時開会中の共進会を縦覧し浅野家観古館、縮景園等を一覧し国泰寺で義士の遺物を見て、「散る花を雪とながめて義士偲ぶ」と駄句り、同十五日は仲田氏と岩国吉香園の桜を観にゆく。有名な程あって見事である。「咲たりな錦帯橋畔桜花吉香公園さても結構」とこじつけ帰途宮島駅から厳

島に渡って社参同地の桜も見た。十六日には柳作の三周忌に当りたれば、浄国寺の墓に詣て同寺で読経の弔をして同十七日帰宅した。此頃埋立地に神戸池[47]田氏の陶器石粉砕及製造の工場建設四月下旬初窯焼達あり。漸次建物の増に従って宅の二階からも裏の二階からも眺望の景色を失ひ実に殺風景となった。本年は天皇陛下御即位御[48]太典記念として各地に記念事業を起す事となりたるより、予て松木、宮内、藤村、坂川、村瀬、水野諸氏との養老会員が発企となり、五色浜神社持の砂山に手を入れ従来のトラックを古子川の向ふに廻し、或は楓樹を栽付中間の墓地を他に移し神園とするの計画を立て、有志者の醵金を募り三月中旬から着手してゐたのであるが、其講造方を八幡浜の庭作り神垣某なる人に依[49]託してあったのが四月卅日に来たので、五月三日から松の移植やら楓の栽付等に着手し毎日工事を視、且一方墓地移転の事を米湊の惣代に交渉し尾崎と両大字に借地を相談する等奔走した。五月廿八日に竣功を告げ同廿九日神花落成奉告祭執行。郡長を始め諸官衙長松山三新聞社有志者等を招待し落成式を挙げ宴会を開き、余が発企者惣代として式辞を読んだ。花を五色花と称す。詳細は同神社に記録がある。三月廿八日三郎が麟囿氏の東京に行と同伴して打出に出立した。予て同人の身上始末に就て親友等の配慮になってゐたのであるが、何か身を建てるといふて教員をやめて遂に打出に赴くといふて内を出たが、其実奥嶋カヤノ女と打合してゐたもので打出から電信で南洋に行き度との事であるから、其望に任せて四月二日に新[50]嘉坡へ向ふたとの報知が着た。同七月六日カヤノ女からはるえに三郎着新後健全であるとの報知があった。同月十六日から二階西北の窓上ケ窓を修繕した。八月八日北側借地に井戸を掘八月十七日村上節子が松山の中村武秀氏と婚姻の祝儀があって梅の家の祝宴に列した。八月卅一日友人田中英安氏が八反地で溺死した。予て村上麟囿氏は当地を引払東京に移住する事になって頃日来帰って為たのであるが節子女も引越し荷物の片付も出来たれば九月六日に出発する事になった。然るに家族は弟妹の幼年者であり、又着京しても他人に対する

47 池田貫兵衛の池貫工場のこと。

48 正しくは「御大典」

49 正しくは「委託」

50 新嘉坡＝シンガポール

処もあり、かた〳〵余が同行する事に定め十二時過に汽車で高浜から尾の道に渡り九時廿分発の列車で七日早朝神戸に着し、村上一同は同地在住の大西禎次郎宿所で休息し余は打出の村上を訪ひ、午後奈津江夫婦同伴神戸に来り村上一同と面会し午後六時廿分発の急行列車で神戸を発し翌八日午前八時四十分東京駅に着く。麟囿氏の友人浅野氏が出迎居て共に本郷五丁目四四の麟囿氏の宅に着した。翌日から荷物の片付やら貞子が跡見女学校に入る事やら佐野川浅野両氏へ挨拶に行やらしたが、又麟囿氏又は子供と上野の動物園、東照宮三百年祭記念徳川家宝物展覧会江戸記念博覧会本郷堂と帝国劇場の演劇丸ノ内から日比谷公園三越浅草吾妻橋から小蒸気船で向島に渡りなどして、同十七日午前十一時卅分発の汽車で同十八日朝打出の村上に着した。途中秋雨の中に原駅辺から富士が見へたので汽中冷酒の一杯を傾けた。同十九日英郎同伴大阪を見物し廿一日には単独電車で男山八幡宮に詣て桃山両御陵を拝し京都に出三祭白川橋の稲葉氏を伴ひ点燈時打出に帰った。同廿三日には打出焼の窯元を見て二三購ひ徒歩六甲山麓の苦楽園ラヂゥーム温泉に遊ぶ。鮫躰の瀧恵みの池等あり。尤旅館別荘等の見事なる建物或は楽焼の窯元あり設備至れり尽せり、馬車人力車の往復頻繁なるも帰りも徒歩せり。本日は陰暦八月十五日なれば観月者殊に多しといふ。夕刻村上に帰り英郎と一酌して名月を見る「名月や打出の浜の松青し」「打出出る帆の影白し月今宵」などこじつけ夜を更す。同廿五日英郎同伴箕面に遊ぶ。楓樹は未だ色なきも瀑布の風光水清く丞趣に富む。紅葉を思ふて「錦ヲる箕面の瀧や冬近し」などこじつけて一酌を催し宝塚に廻り温泉に浴し小[51]女歌劇の舌切雀一幕を見て夜に入りて帰る。同廿六日奈津江母子を伴ひ出立翌日帰宅す。同年朝鮮に共進会があって望月から観覧かた〳〵来よとて、幸に奈津江が留守中は逗留してゐるからとの事にてるを伴ひ事とし、十月八日午後五時半出船の加茂川丸に乗同九日午前三時半関門海峡に入夜の明るを待て五時半門司に着、直に上陸下ノ関に渡し停車場に至午前十時十分発の壱岐丸に乗。生憎西風強く船動揺忽ちてるは船暈[52]にし苦

51 正しくは「少女」

52 船暈＝ふなよい

しむ。一時は或は下ノ関に引返すべきかとの船中噂もありしが稍くにして夜九時四十分釜山に着。十一時十分発の汽車にのり同十日九時四十分龍山駅に着望月一同及松本氏夫妻の出迎をうけ望月に至る。夜憲雄を伴ひ京城共進会の夜景を見る。同十一日は雷雨の為に徒然。同十二日秋江母子同伴南山公園で昼食し三越により北村氏を訪ふて帰る。同十三日朝遥かに飛行機を見る。午後新市街を散歩す。同十四日京城家庭博覧会と共進会を縦覧す。同十五日憲雄を伴ひタコダ公園から共進会場内の夜景を見る。同十六日練兵場に飛行機の着陸するを見て共進会に入て近藤氏の依頼により百木氏を訪ふべく住所に至るも不明徒しく帰る。同十七日秋江母子同伴、孝昌園に遊ぶ。当日は地方祭で神輿の渡御があって龍山も大に賑ふ。飛行機を近く見る。同十八日共進会を観る。同十九日操を伴ひ京城動物園博物館植物園等を見て家庭博覧会に入る。場外で松木彬氏に邂逅して互に意外であった。折節雨が降り出たのでてるは操を伴ひ帰り余は松木氏に誘はれて鶯谷の神音といふ料理屋で氏の饗応に逢ふた。同廿一日松木氏の旅館を訪ひ再び百木氏を探がし稍く寓居を見当りたるも主人不在、細君に委細を談して帰途東洋美術品展覧会を見る。同廿三日憲雄と操を伴ひ大倉喜八郎氏の設立に係る商業学校の運動会を見る。同廿四日秋江母子と新市街から漢江畔に出て鷺梁津の渡しから暫く眺望して帰途、鉄道倶楽部の庭園から総督邸に廻って帰る。此辺前年に来た時とは大に変って居た。同廿五日共進会を見る。当日は和鮮芸妓約四百名の総見物があって鮮妓広橋組約五十名の仮装楽隊行列等なか〳〵賑ったものである。同廿六日秋江母子同伴共進会場に入、演芸館で妓生の舞を見た。何にも分らぬ事であったが併珎しきものを見た。慶会楼畔で一行紀念の撮影した。同廿七日秋江と二人で開城に行く。水色、一山、金村、汶山、長湍の各停車場を経て午前十一時開城に着、停車場前の大和屋旅館で午餐し、腕車で南大門善竹橋人参培養場等を見て満月台に参り高麗宮城の古瓦発掘陶器等を求めて、午後二時四十分発列車で五時半望月に帰った。善竹橋で「忠臣の血のあと訪ふや秋の暮」明月台

で「紅葉散る古き都の瓦屑」。同廿八日又百木氏を主人に面談一酌の饗応があった。同夜松本弥三氏から招かれて望月一同と共に饗応に逢ふた。同廿九日午前八時四十二分発の汽車で出立した。望月一同松本中山住友溝口諸氏の停車場迄見送をうけた。午後七時釜山に着直に高麗丸に乗八時四十分出船した。海上平穏同卅日午前七時過下の関に着した。生憎雨天で時化模様なので宇品迄汽車に枉て十時十五分の発車に乗午後六時広島に着停車場前の鶴水旅館に着し、同三十一日午前七時五十分の発車で宇品に出八時卅分出船の相生丸で高浜松山を経て午後二時前無難帰宅した。京城共進会のことは別に会場案内等があるから略す事にするも概して成功なるべし。各道別に出品を陳列し名所古跡は図解と模形とし併合前後の諸事は諸官衙、学校、農業、土地台帳、諸器具等の類悉く比較し其実況を一目に見る如く器具人物皆縮少の模形[53]とし或は装飾に各道の物産を用ふる等注意最至れり。又前年聞かざる点聊左に記す。教育費の賦課の如きも和鮮人の区別あり。故に学区別に等級に依り戸別割とし墨一枚に付何程と定め家屋税は湯室、亜鉛葺瓦葺、区別し五坪十坪廿坪三坪[54]の等級ありと云。某夜大工の棟梁山口なる人来り説明に曰く、当地の家屋建物は悉が南に傾く是は自然南方が温度を先に加えるが故に土地の氷結が他の方面よりも先に融解するが故なり。又亜鉛屋根と瓦葺とを接続するときは自然軽重によって分離するの患あり。従て敷居の如きも中央が高くなるを免れず但総て冬季は地盤が氷結して高くなり暖気向ひ氷解に従て平均するの際或は南に傾き又は重き方に下るの理なり。温室を造るには馬糞を水にて晒して土に混して塗其上に厚き紙を張り又其上に吹□紙に同しき質の紙を張り其上に油紙を張りたるものを以て上等とす。而して約八ヶ年を保と云ふ。但浴室の床には丸瓦を伏せて火気を呼ふものなるが其構造も工拙あり未だ鮮人には及ばずと云。同年十一月十日京都紫震殿[55]に於て御即位式を行はせらるゝにより、当町役場下海岸空地に式場を設け午後二時一発の煙火にて町民式場に抜三時三十分の煙火一発にて玉川助役の号令により東方に向て最敬礼、次て宮内町

53 正しくは「模型」

54 おそらく「三十坪」が正しい。

55 正しくは「紫宸殿」

長の発声に従ひ天皇陛下の萬歳を三唱して祝し奉り散会、町役場内にて奉祝の為紅白餅を配付す。余は賀表を宮内大臣に宛進達す。町内は早朝から小国旗桜或は楓等を□手に張て装飾し、各戸に藤松を栽国旗及組合旗台提灯を揚げ臨時電燈を思ひ〳〵に取付けて、一周が間昼夜の別なく手踊り俄か或は仮装行列素人相撲等前代未聞の賑なりし。十七日には装飾の門で家族一同奈津江母子共に記念の撮影す。賑には一戸一人必ず出るとの事で四郎が袴を着たり又は洋服姿となって組合の行列に加った。十二月廿日南町浜通に通ずる梢川に架橋の開通式があった。是は余が町長就職中に明治天皇御即位五十年紀念事業として町会に謀って置たものである。夫を今般の大礼記念として実行したのである。余も招かれて郡長始と共に式場に列した。

大正橋

梢川に架かる橋である。

大正五年　渉　六十九歳

大正五年一月卅日は陰暦十二月廿五日に当り恩人故国嶋六左衛門氏の五十年忌に相当するから大洲寿永寺の墓参を思ひ立居たるに、はるえがまだ大洲を見ぬから同伴を望んで学校の休み中につれて行て呉と云ふ処から、一月六日小蒸気船で長浜迄同所から馬車で大洲に着本町の松楽楼に一宿し、翌七日朝寿永寺に

詣て住職に回向を頼み墓前に香華を手向て「木枯に亡き人偲ぶ五十年」。墓参の後町内を散歩臥龍[56]の河内氏の邸を一見し八幡宮に参詣して午後又長浜を経て夜に入て帰った。国嶋氏の事はいろは丸顛末と共に別に記がある。同八日予て宮内六郎右衛門氏の誘引に任せ加入したる互楽会と云ふ煎茶会を今日宮内氏の宅で開会があって出席した。此会は毎月廻り宿で会主は吸物と一肴と夕飯を饗し会員各一酒一肴を携最初煎茶の手前をなし終て持寄の酒肴を開き書画の合作をする等の至極簡易な会で、其会員が余が加って十名になり七八の両月を除き抽籤で当番を極めるのである。予て思ひ立て居た裏の部屋を修繕して一先退引し表は貸家にして当分家賃を以て活計を立る事に決定した。其故は「　省　略　」四郎も予て輸出向の竹細工を習ひ追々職工を入て製造を試みるの計画が欧州戦争の為に輸出は減ずる染料は高くなる処から三津松山の製造家も追々廃業するの状況となり将来の見込も立兼る処から都合次第薬剤士学校に入るべき考もあり、かた〳〵二月十三日から大工が来て工事に着手し同廿六七両日に前年建継だ残りの分を新たに建替引続き勝手であった処を居間を改造し住居を建る等、毎日大工左官来る。三月十六日弥四郎が東京の薬剤士学校に入るべく出立した。四月一日昌一を当町の小学校に入学させ宅から通ふ事にした。五月二日四郎が壮丁検査を受ける為に帰宅し同四日受検の結果丙種になった。脊丈ヶ不足の為と云ふ。奈津江母子は裏家修繕が出来て一回引移る迄手伝旁逗留す

『いろは丸航海日記』写本
（所蔵：伊予史談会）

56　臥龍山荘のこと。

ると云ふて居たのであるが四郎が東京に行序に同伴する事になって同五日出立した。五月の末に至って稍く裏家の修繕粗出来あがった。続いて六月二日に表西側の間に接続して理髪床を建増し裏家の準備も全く整ひ表家の借人も定まった処から七月四日引退引移った。其後も人工や左官が来て表の垣を塀に建替門を建る等全く工事を竣ったのは九月に入てゞある。本年は七十才になった処から八月一日松山で撮影した。足は子女から祝して種々な品物を贈り越して貰ふたに対し「古来稀といふ年にまで生きにけり思ひ之事は齟齬々々にして」といふ戯を添て送ったのである。［　省　略　］同十月十八日近藤亀吉氏が人夫に楓樹やら欅やら石やらを運ばせて自ら指図して庭を造る。同廿二日に至て落成した。是は氏から引退の歓として諸費用を償ひ意外の事であった。同十一月三日立太子御式奉祝式小学校に於て挙行参列した。小学生徒を始町民旗行列をして奉祝した。同十一月十五日出立互楽会員宮内六郎右衛門、同小三郎、同穣、同清一郎、同三郎諸氏と小豆島に遊ぶ。午前四時当港出船の佐波川丸に乗同十六日午前四時高松に着屋島山に登り栗林公園に廻り同夜十時四十分出船の大井川丸で小豆島に渡り坂手の広島屋旅館に投し、同十七日腕車で寒霞渓の麓上村に着したる頃から降雨悪しくなった処から高橋旅館に一宿し、翌十八日山表裏共景を賞し同夜湊川丸に乗り同十九日正午帰宅した。詳細は寒霞渓土産と題する一冊がある。

大正六年　渉　七十歳

大正六年三月六日予て伊予陶器会社の技師関岡氏から楽焼を勧めて貰ふて居た処、職工を伴ひ来り、窯を築く。同月十日の早朝近藤亀吉氏が来て九州で組合持の炭鉱を他に譲渡しの契約をして明日其登録をする筈であって高浜から乗船した。処が浪高く忽船暈を発して行事が出来ぬ。就ては実印を要する事柄で他

に依頼する都合にならぬから是非共今から福岡迄出向て諸事を結了して呉との余議ない頼に任せ二番列車で高浜に出別府行の中津丸に乗九時卅分出船午後四時前別府に着戎屋旅館に休息温泉に入浴し、七時廿分発の汽車で十二時四十分博多駅に着、福岡市の旅順館に投したのは翌十一日の一時廿分であった。予て同館で待て居た橋本謹爾氏に面談し又契約周旋人の河部瀧次郎、坂田健太郎氏等と示談し、同十二日譲受人堀川園氏に面会の上諸手続をなし稍く午後四時登録済現金受[57]授を了したり。翌朝諸氏は夫々引取ったから最早自由の行動を取る事が出来るので太宰府天満宮に参詣した。梅林の花見頃で曇天なりしにも不[58]拘宴を設けて三味などで騒ぎゐるもあった。「天にまで香り満なん築[59]紫なる宮の御園の梅の盛りは」とこじつけた。又東西の公園に至る西公園の光雲神社境内には桜を夥[60]多栽付があり花の頃は定て賑ふであらうと思ふた。平野國臣の銅像あり、坂上からの眺望最も佳なり。学生の団体の遠足幾組もあった。電車で東公園に向ふた。此処には亀山上皇御銅像日蓮上人の大銅像を中心として松林の広大な事は実に愉快であった。上皇御銅像台の正面に敵国降伏日蓮の方は立正安国の文字があり又上台銅製には周囲に文永十一年十月廿日元軍水城に迫る少弐景資敵将劉復亨を射る吾軍従是振ふとありて其図あり。又文永八年九月十二日吾祖大士松葉谷にて捕はれ龍ノ口刑場に引かれ玉ふの図と題する日蓮等の絵図あり。又建治元年四月元使杜世忠等五人来る言辞無礼九月之を龍の口に斬るの図と題する画図あり。又宗祖鎌倉小町の衢に立て説法弘通の図と云ふ画図あり。又文永十一年十月五日元軍我対馬に襲来島民を惨殺するの図と題する画図あり。又大学三郎殿中に於て安国論を講するの図と云あり。又時宗宗祖の流罪を赦し殿中に招し外寇防禦策を聴問するの図と云があり。銅像丈三丈五尺台高さ三丈五尺首回り四尺二寸袖長さ十三尺五寸裾回り五十七尺重量壱万九千八百貫目落成明治三十七年と掲示あり。夫から又電車で箱崎に至り八幡宮を拝して海岸の風光を眺めて抱洋閣の潮風呂に浴し同所で午餐を喫した。折から雨が降り出したから急ひで宿に帰った故に名島

57 正しくは「授受」
58 不拘＝かかわらず
59 正しくは「筑紫」
60 夥多＝かた

の弁天には行かず「箱崎や白砂青松春の風」。同十四日雨中十一時前発の汽車に乗福間駅に下車して近藤氏の心願成就代拝として腕車で宮地神社に参詣した。新設の神園等があり参詣人の為に旅宿軒を並べ盛んなもので福間から馬車の軌道もある。当日の如き雨天に不拘参詣人は絶へない。祈願者は鉄の鉾を受けて帰り又心願成就として鉾を納めるが例との事で大小沢山の鉄鉾が山の如く堆くあって自由に夫を無償で持帰る事を得るのである。余は則当日納めた年月日の記入してある鉾二本の内一本を持て帰った。近年運の神として諸方から参詣人が夥多あるとの事であるが社格は県社である。同日門司出船厦[61]門丸で夜十一時抜錨同十五日朝七時帰宅した。〔省略〕六月十六日予て今年は一応帰ると三郎から報知があってゐた処神戸から電報が来たので春江が昌一を伴ふて高浜迄迎に行同伴して帰った。〔省略〕三郎が帰ったに就ては久し振であるから秋江も呼四郎も夏季休業中に帰る事とし奈津江も呼寄兄弟姉妹一同揃ふ事に双方へ相談してあって前日から三郎は渡鮮し居て八月七日午前四時前秋江母子(憲雄、操、明、薫)を伴ふて着船し八時過四郎は打出から圭二を連て帰った。同十日初て陶器窯積して午前十一時五十三分から焚初めて午後四時廿分に焚上げたが釉薬の掛方が薄かったので完全なものは甚少数である。同十一日松山堀の内で有名のスミスの飛行があって次郎を始めはるえ、昌一、圭二等を伴ひ行。中村氏の誘引で営所の某室で見てゐる処へ四郎が来て今三津から奈津江を同車した。奈津江は直に宅へいったとの事であった。一同揃ふた処から同十五日彩浜館の庭で紀念の撮影して祝宴を開き村上義兄と藤村さちよ女母子等来会愉快に遊んだ。秋江が東京を見て帰りたいと云出し四郎が夫を勧めた処から予等夫婦同伴する事になって同十七日秋江、奈津江、四郎、憲雄、昌一、圭二、香、薫を伴ひ午後六時発の列車で高浜に出て十二時発の松江丸に乗る。望月の操と明は宅に残したのである。同十八日神戸を経て打出の英郎宅に着す。同十九日秋江、四郎、憲雄同伴神戸に出午後七時三十八分三宮発の急行列車に乗る。幼児は奈津江に託して打出に

61　厦門＝アモイ

「鳥も及ばぬスミスの妙技」

海南新聞、大正6(1917)年8月12日　(所蔵：愛媛県立図書館)

残した。同廿日正午前東京本郷の村上に着した。途中幸に富士山が少しの雲霧もなく眺望して一同満足した。同廿一日に麟囿氏の案内で自動車でお茶の水橋を渡り九段を経て外堀線に出四谷、赤坂(乃木大将邸にて下車巡覧)日比谷二重橋芝公園銀座通を経浅草上野公園を巡覧した。同廿二日には四郎に案内させ安井氏を訪問し泉岳寺から浅草に出て活動演劇等を一見す。同廿三日てる、秋江等は帝劇を見る。同廿四日午前七時廿分上野発列車で十一時五十分日光に着し神山旅館に投宿直に神社に参詣。同廿五日早朝出立人力車にて中禅寺に向ふ。般若阿含華厳等の瀑布を見て十時廿分湖畔の和泉屋に着した。諸所見物の上午後三時五十五分発の列車で七時四十分上野に帰った。同廿六日午後九時発の列車で東京を出立し同廿七日大阪に下車し午前十一時電車で打出に着した。同廿八日秋江母子は関門の間で宅に残した子女と出逢ふ筈で出立した。同三十一日奈津江母子同伴上阪住吉社に詣で天王寺公園ルナパーク中ノ嶋公園等を遊歩して帰った。九月二日午後五時神戸出航の紅丸にて昌一を伴ひ翌三日午前十時過無難帰宅した。［　省　略　］十一月十五日出立互楽会員中四氏と厳島の観楓に出向き岩惣に着し十六日には弥山に登り光明院では国宝を拝観し翌十七日帰った。［　省　略　］

大正七年　渉　七十一歳

大正七年一月六日［　省　略　］同八日奥嶋カヤノ、金村愛太郎氏と三郎新嘉坡へ前途はるえが高浜迄一行を送った。予て今年は朝鮮行を思ひ立てゐた処六月十日寄港の吉野川[62]で門司に渡り十一日十時卅分発壱岐丸で夜十時釜山に着十一時卅分発列車で十二日午前九時過竜山に着すと秋江母子が出迎へて居た。滞竜中京城の諸所見物は再三であるから省く。就中漢江の人道橋は始めて渡って見た。又鷺梁津の漢江神社

62　正しくは「吉野川丸」

に詣たが頗る眺望がよい鳳山遊園も一巡した。戯に「漢江に帆を干舟や五月晴」「バタ〳〵と音するかたに来て見ればせなせり合はせ鮮婦せんたく」。七月八日九日降雨十日に至漢江河岸の水漂によれば増水廿五尺と云ふ。江岸に出水の状況を見るに既に電車道を浚し遥かに永有浦を望めば島の如し。十三日には出立帰途につくべく準備中近藤氏より電報あり。次で書状着廿五日期限で馬山に受取べき金子がある。迷惑ならんも序に受取て帰って呉との依頼であるので夫迄滞在に決した。十五日夜の漢江の精霊流しを見る。京城を始め諸所より精霊舩に供物を並べ小灯燈を数個燈し鐘を叩き或は高声に念仏又は題目を唱へ数人にて送り来り悉く漢江の中流迄鮮人が舟にて引出して流す。其供物を鮮人の子供等が奪はんとする。夫を制する等にて頗る混雑増。同廿一日京城鐘路通り大華館で鮮人の書画会を始て開くとの広告があった。幸に秋江同伴参観して有名の金圭鎮(号海岡)其他に書画の揮毫を得て同席で百木恵一氏に面会した。同廿四日午前八時五十分発の列車で出立夕六時三浪津に着した。馬山の金子受取は明日であるから同所の森田旅館に宿し同廿五日九時卅分の一番列車で旧馬山に向ひ十一時新町の玉野一氏宅に着し諸事打合する。金子は明日でなければ纏らぬとの事に左山旅館に投した。同廿六日才[63]判所前の高橋といふ代書の宅で金三千七百円を請取事になった。処が午後になっても纏らぬ。其うち非常の暴風雨になって殆んど往来も止まるといふ実況である。然るに稍く午後三時前になって金子は受取った。夫を送金の手続をするには新馬山の銀行に行かねばならぬ。銀行は四時限といふ、心は急くに車が無いといふ。稍く新馬山に大塚寅吉が人力の帳場を構て居るといふ事を思ひ出し電話で迎に来て呉と打合直に行との返事はあったが待てども来ぬうちに一挺の車があるとの事に急ぎ乗って出たものゝ往還の並木を悉く吹倒すといふ暴風中であるから荷車の様に一足抜で屢々止っては尓行くといふ危険至極である。中途向ふから大塚が迎に来て呉たと引合たが引返させて稍く四時に十分前といふ時銀行に乗つけた。直に送金の手続をして大塚は銀行の隣家である処から

63　正しくは「裁判所」

幸に大塚で休息して其以来の物語に時を移し夕刻大塚から二人掛りで宿迄送って呉たが宿は室によっては畳を上げて雨漏を防ひでゐるといふ現状で諸所瓦飛塀倒れ実に馬山前代未聞の荒であるといふ。同廿七日は快晴で汽車の都合で新馬山を散歩し後藤といふ骨董店で吉田松陰の小軸と古陶器を購ふた。午後二時五十分の列車で出立三浪津で乗替七時過釜山に着し新羅丸に乗八時卅分出船二十八日六時四十分下ノ関に着門司に渡り肥前又で休息し午後六時出船の武庫川丸で廿九日午前四時郡中に帰港した。留守中無事。滞竜中此前海城を一見したが今度は平壌を見度と秋江に話した処が幸に中山氏の親戚が平安北道の宣川迄行から同行して今少しの事であるから安東県迄歩をのばして釈仏海和尚を訪問してはだうかと秋江の勧める侭に七月十九日午後九時五十分発の列車で翌廿日午前八時に宣川で某氏に別れ十時廿分安東県駅に着し人力車で鎮江山の臨済寺に仏海氏を訪ふた。処が生憎内地へ旅行中で大に落胆したが留守居や寺男に親切に待遇して貰ふたので一宿する事にして午後鎮江山公園を始め支那市街等を散歩して鴨緑橋を渡って見たが何ら人力車夫が皆志那人で言語が不通の為に不便で思ふ様に見物が出来ぬ。稍く物産陳列場に入て少し土産物やら絵はがきを求めて記念に供る事にした。鴨緑橋は満鉄の経営で明治四十三年八月起工同四十四年十月竣功建築費金百五十万円全長三千九十八尺経間弐百尺六連三百尺六連内一連開閉橋(一日四回開閉)開閉動力四人(橋上宙空に一室あり此内に居る)予備として石油発動機一台据付け。鴨緑江延長約四百五十哩航路延長中江鎮線二百三十哩といふ。橋上に番兵あり。双方に税関吏の出張所があって総て手荷物に至迄検査して居る。一宿した寺は鎮江山公園の上に在り鴨緑江を遥に見下し殊に月夜の景色拙筆に尽さず例の出たらめ「短夜の夢に過たり鴨緑江」「国跨ぐ鴨緑江を納涼かな」「電燈が鴨緑江の蛍哉」。寺で夜食後大の一僧が来て壮快談やら力自慢やらの末当地の状況は見認たりとの問に何ら其語は通せず単独の散歩で或は尚見るべき処が沢山あるであらうと答へると夫はつまらぬ明日は拙僧が案内して委しく説明するか

ら其支度をして待て居れ。当地から輸出する物産や豆滓が一ヶ年約千二百万円材木には九百万円であるなど僧に不似合の事も聞たが翌朝寺男の云ふには彼は米屋藤吉といふて実業家であったのが失敗の末坊主になったので其精神に変状もあるとの事であった。翌廿一日は曇天で霞が深い処から最も雨になっては雨具の用意が無いから昨夜の快僧との約束には違ふが出立して帰らうといふと、留守居も寺男も二三日逗留せよといふては貰ふたが、必ず一宿て帰るといふて出たのであるから定て秋江が気遣ふであらうとも思ひ旁午前七時廿分の列車に乗る事にした。其時刻の事であるが満州時間は一時間後れるのであるから七時廿分は川一つで新義州に渡れば八時廿分となるのである。停車場迄留守居の見送をうけたが停車場は改築計画中でもあったが流石に大陸の実況が現れて居てなんだか不取締の様に思はれた。午後一時過平壌駅に下車し傍の待合に休息して腕車で牡丹台に向ふ車夫が内地人であり能く説明して呉たので便利であった。朝鮮市街に入て先一番に大同門練光亭を見る。小西行長と明将沈惟敬が和を講した処といふ。夫から牡丹台に至る。大同江岸の左側の山に沢山の自然岩に文字が彫刻されてゐる。車夫は皆昔の役人が名を刻したものであるといふたが朱文字もあれば白いのもある。筆跡に見事である浮碧楼、此楼は一千年前の剏始[64]に係る八百年前高麗睿宗西巡の際多の臣寮を会して盛宴を張り扈従[65]李顔の命して浮碧楼と名付たりとあり。古人箕城八景の一とせり乙密台、文禄の役敵将馬王毘之に拠り固守し或は戎衣を脱して松樹に掛擬兵を示したる処と云ふ。有名の玄武門箕子の陵等を見、傍の茶店で絵はがきを求めて待合に帰った。牡丹台から大同江の眺め絶佳なり「月雪を偲ふや夏の牡丹台」。同二十二日曇午前一時廿分の列車で七時五十分竜山駅に帰った。秋江が迎に来て居た。又望月が予て二ヶ所の伐木仕成を計画して店たのが此節の出水で着竜し夫を材木として売捌く事になった。其主任は西野幹といふ元常州[66]人であるが営業届の店主にする訳にもならず、本人も他に定て呉といゝ旁其名義人になって呉との事に漢江通居住材木商の届書を出した。又秋

64 剏始＝そうし

65 扈従＝こじゅう

66 常州＝常陸＝ひたち

縣下の米騒動
▽郡中町より松山に及ぶ
▲郡中町
▲松山市
▲七箇中隊
▲大街道廻

「縣下の米騒動」
愛媛新報、大正7(1918)年8月19日　(所蔵：愛媛県立図書館)

江が今年三十三になるので心祝をするとの事で七月七日に懇意の人々を招いて饗応した。戯に「主しは百私しは九十九までぞと契りかためる三三のとし」。同年八月になって大戦争の影響からして諸色高直遂に一升の米が五十銭以上になった処から諸県に米騒動が起って当地も湊町の浜では寄々米屋を襲ふとの噂があるとの事であったが十五日には湊神社に寄り集まり弥騒動が起るとの事であったけれども、まさか其様な事はあるまいと強て気にもとめずに居た。処が夜に入と共に徳本氏を最初として稲田氏其他米穀商を悉く襲ふて乱暴し家具を破壊し米麦を往来に散布する等言語同断、既に近方の米屋に来り戸障子を破壊する音が手に取って聞へる。表家にも来るとの事に出て見ると、十五六人の者が棒を携へて駈け来り表戸を一撃したが、前以て戸は明け放して置くがよいと注意して居たので、荷車を店内に押込みがや〳〵騒ぎしも、幸に近所の人々が立入て諭し稍くに大事に至らず他に転じたが、徳本氏の如きは造酒を抜き放し庭内酒の泉をなした処から、其後近方の井水に故障して飲料に差支へるといふ、実に意外の騒動であった。同十一月四日発表四郎が薬剤師に合格した。同廿七日神奈川県川崎の冨士製銅株式会社分析部に従事したとの報があって一先安心した。

大正八年　渉　七十二歳

大正八年己未一月二日試筆勅題朝晴雪「眩ゆさよ雪に旭の二重橋」「うらゝかや一望千里ゆきの朝」未年に生れ六回の未年を迎へて「はかどらぬ未のとしも積りけり七十三の春をむかへて」。同月十八日四郎薬剤師免許状が内務省から着した。二月十六日予て麻生の門田延吉氏の依頼で同家相続者縁談に関係してゐた。処が氏が大病に罹り相談に行く事が出来ぬから面談の為に来て呉れとの事に宮内六郎右衛門氏同伴訪問、万事示談の末三津の宮内本三郎氏に面談の必要があって同夜氏を訪ひ協議中門田氏急変死去の電報が達した。其以後は相続者選定方に就て彼是複雑な事情があって、親族会員にも加はり又証人として地方裁判所へ呼ばれるなど随分面倒な事であったが、最初から見込の通りに解決した。三月七日村上義姉が病歿した。三月廿七日新嘉坡の三郎から歯科試検に合格して免許を受けたとの報が達した。四月十日から松山に物産共進会があって、十三日に彼の門田氏一件の序かた〳〵一見した。城山天主閣の武器陳列、伊予史学会の発企になる史学展覧会等も一覧した。同会には月窓公の和歌を始、砥部古陶器郡中港改築図其他古証文等を出品した。五月卅日予て会員順番に毎月開く互楽煎茶会五周年記念会を彩浜館に開き来遊中の大野竹皐画伯招ひて合作を催した。六月三日都合によって四郎が帰

『伊豫史料展覧會出品目録』
（所蔵：伊予史談会）

宅した。近日奈津江の居住しゐる打出へ出向く筈である。夫迄にと同十三日に亡父の廿五回忌太郎の十三回忌を併せて弔ふた。同十六日に四郎が出立した。七月一日大戦講和祝賀式を各学校に挙行し郡中小学校の式に参列した。四月十日三郎が帰着した。同行したかやの女が兎角病身で保養の為に帰ると、彼の地も大戦争の影響やら志那人の暴動やらで今暫く彼の地に開業する事は見合す方が利益として、かた〳〵一応帰る事にしたのである。十月二日予て今治からお房が来てゐて杉野祖母の五十回忌を弔ふ事になって、原町の池田旅館で法事を執行ふに参会した。［　省　略　］同十五日出立面河探勝に出掛た。同行者宮内六郎右衛門、宮内清一郎、宮内三郎諸氏で、同夜渋草に泊り翌十六日若山の中川旅館に投して面河に向ひ、関門を始め諸景色を眺め石槌[67]山犬吠へ一里廿六丁と標木ある登山口の畔迄引き満山の秋色を賞した。同十七日笠片に一宿し翌十八日帰宅した。別に探勝日記がある。途中「稲刈や櫨の紅葉を余所に見て」「黄金散る蜜柑の畑や冬隣」「山ゆけば水引草の花咲けり紅葉野菊を進物にして」。面河にて「行秋や面河関門水清し」「面河渓思ふて見ればおそろしや獅子岩熊渕虎瀧もあり」。宿にて「秋晴れや面河の宿に図案して」。帰途雨中白猪の瀧を見て「瀧道の錦洗ふや初時雨」。十二月卅一日四郎帰着、予て神戸の加古胃腸病院薬剤師として打出から通勤してゐるのであるが、越年の為に帰ったのである。

大正九年　渉　七十三歳

大正九年一月一日小学校の拝賀式に列し彩浜館の祝賀会席に列り、午後家族一同と試筆。勅題田家早梅「籾ほした軒の南の梅の花」「牛の脊にたって梅打音とかな」。戯に「生活のかくやかましき世の中にそも大正九はおそれつゝしめ」。一月七日四郎打出に向ひ出立す。三月五日京都の稲葉七穂氏が大洲からの

67　正しくは「石鎚山」

第1回　国勢調査のポスター(出典：統計博物館ホームページ)

帰途山田氏に一宿して面会したしとの事に訪問して、氏の誘引で山田氏と三人つれ道後温泉入浴する事になり、其支度に帰ると朝鮮の内田半治氏夫妻が来訪、珍らしき来客故に共に五色園を散歩し彩浜館で午餐を共にし、停車場に山田稲葉両氏と出会共に道後に着し、内田氏は前日来の旅宿ありとの事に我等は鮒屋に投ず。翌朝内田氏を促し石手寺に詣て彼の玉の石等見て岩関に至り内田氏夫妻の出立を見送り、翌七日稲葉氏が尾の道に渡って帰京を高津[68]に見送る。五月廿一日午前三時の高浜丸にて今治の祭礼に行、九時山野氏に着す。翌廿二日偶然小林欽太郎氏の宅前を通り訪問、翌廿三日小林氏の案内でラミー工場を一見し山野氏に逗留中のはるえと共に又高浜丸にて帰る。同夜頻りに時鳥を聞光明寺の松に来りしものと覚ふ。六月二日朝鮮から憲雄、操、明の三人を山口の未亡人が伴ひ来る。同十六日打出から奈津江母子四人連にて着す。同廿三日憲雄一行出立明日広嶋に渡り帰ると云ふ。同卅日奈津江一行出立帰途につく。九月二日白潟雅吉老死亡の報があった。同五日松山の中村武香氏が露国から凱旋したに、生憎隣家の老人が死亡の為に迎へる事が出来ぬ。三郎を遣はして扇を贈った。「凱旋や忠庚申の今日の秋」。同月卅日午後十二時国勢調査の為に警鐘をならすを合

68　正しくは「高浜」

図として現在住宅者を調査して予て配付の用紙に認む。黒星松枝女滞在中。十月十三日予て朝鮮の望月から事業上に付相談旁来て呉との事であって、午後十一時着の佐波川丸で去る九日に渡鮮の為に帰宅して居た四郎を伴ひ出立、翌十四日午後五時門司着。直に高麗丸に移り十五日午前八時四十分釜山着、急行列車十時発午後八時竜山に着し望月家族悉く出迎ゐる。同十七日京城神社の祭礼で屋台或は仮装行列等賑ふ。四郎は親友の栗田氏同伴、平壌開城水原等を見て同廿五日出立して打出に帰った。望月の事業は新案特許の安全瓦といふセメント製瓦で既に工場を設けて専ら製造中である。其事務整理を託され最初からの収支計算やら諸帳簿の整理やらに従事す。其間に著しき出来事は十二月十二日常に事務所に詰居たるも計算書を認の便利上、望月の温室で机に向ふてゐた。午前十一時卅分地響き強く一大爆発の音あり。傍に居た秋江に何か爆発といふと、秋江は立て玄関の方に向ひ大変〳〵と云つゝ戸外に出たれば、内玄関に出て見ると松本氏の細君が幼児を抱へて、此通りですチヨンガは大変ですとの事に、何が何やら分らぬながら坊っちゃんの傷はお気遣ひに及ばぬと云ゝ捨てゝ戸外に出ると、右往左往に駈け違ふ人々に近所に火薬があるかと問ふと、毛利ですといふ、其毛利は何處ですと問ふと、傍らに立てゐた女が此表の毛利ですと答ふ。大通りは群集で通行が困難と思ひ裏道を栄町の通りに出ると、東側の土蔵造りの立派な家の庭先が破壊されて二階に突抜けてゐる。往来は硝子の微塵になったのやら木片やらで通行も出来ぬ様になってゐる。駈りて来た人が定て負傷者が沢山あらうといゝつゝ、仰向てあれ屋根に人が死んでゐるといふから其方を見ると、向ふ側の洋服屋の看板の後ろに鮮人とも日本人とも見分る事の出来ぬ男が衣類はボロゝゝになって倒れてゐる。其うち夫を下すつもりで梯子を持て来て屋根に上る人がある。夫を見て今下してはいけないと止める人がある。追々群集するから一先望月に帰って見ると、玄関から診室何処にも負傷者が寝させてある。秋江は金蔵(鮮人)が宏を抱て出てゐるが帰って来ぬといふから又爆発した処に見に行と、京城から

自動車ポンプが来る、消防夫が奔走するといふ混雑であるが、金蔵は見当らぬので又帰って聞と、今廻り道をして帰って来たといふ処である。松本のチヨンガは二階に寝せてあるといふ。今憲麿は一人の小娘に手当をしてゐる。其傍らに六七才の男児が絶脈してゐる。玄関には鮮人の男と毛利の店員の妻女が寝てゐる。奥の間にも居るといふ雑踏混雑で警官が土足で上って来る。現場よりも望月が混雑してゐる。其うち長原や平田や各の妻やら五六人が内玄関に駈けて来て、余を見ると奥さんがといふて女は泣きながら上って来る。何の事やら少しも解せぬのでいや宅には何の事もないのじゃといふと、はて夫はまあと皆口を揃へて十字病院の奥さんが爆発薬の為に死なれたと聞き飛んで来たといふ。爆発は毛利火薬店であるといふと、皆々大に喜び女共は警官の泥靴のあとを掃除するやらの手伝で、漸く負傷者は夫々病院に送るもあり又望月に入院するもあり、一先混雑が終ったのは午後二時であった。但松本氏の幼児は十六七才の鮮人が脊負ふて毛利の店先大通りに居たのを突然七八間も吹飛されたのである。遂に鮮人は一眼を失ふに至る。屋根の上に吹上げられて死んだのは日本人で、都合即死三人負傷は五六人であった。望月の宏は金蔵が抱へて出ると凧が切れて飛んでゐるので夫を竜山橋の方へ追ふてゆくと大爆音があったので、何か大変が起ったものと其侭廻り道をして帰ったといふ。いつも毛利の店前へつれて行ものを切凧の為に災難をのがれたものである。其後松本氏の細君が来られて本年は此近方種々の災害が屢々[69]あるとの事に戯に「災は皆爆発しさるのとし来るとり年はケッコーとなく」。追々寒気厳しく結氷の頃となりたれば同月十六日限製造を止めた。従て用事もないので同廿一日雪降中午前九時四十五分発の最早急行列車で出発、午後八時過釜山に着新羅丸に乗、廿二日午前七時十五分下ノ関着、豊国セメント会社等の用を済ませて午後五時発の紀淡丸にて翌廿三日朝五時前高浜に着、風波の為に郡中に寄港せざりし故なり。九時過帰宅す。

69　屢々＝しばしば

大正十年　渉　七十四歳

大正十年一月一日小学校の拝賀式に列し終て祝賀会の後宅にて例に依て家族一同試筆。勅題社頭暁「静粛や神鼓ひゝきて初からす」。一月廿九日予て朝鮮望月の事業製瓦の件で発明者の長原が来ることに協定して居た。夫は地方に分権を希望の向きもあり、かた〳〵瓦の型を大坂で鋳ることせば幾分の便利あるならんとのこと、或は事業を株式会社にするが利益との説からして、村上英郎にも相談の為長原同伴上坂する事に決して居た処から早朝当地で出逢ふて乗船の約束してあった処、生憎風波の為に汽船が寄港せず高浜に直行したとの事に同港で長原と邂逅の見込で高浜の待合所で長原を待たに、如何間違たか長原が未だ或は前の便船に乗たかの様子があるので、十二時出帆の十二宇和嶋丸に乗り翌卅日の午前五時神戸に着。打出の村上に着したのは八時前であったが、長原の様子が何とも分らぬので双方へ電信で問合などして、稍く二月四日に長原が着した。其翌日から神戸大坂と諸所へ同伴して瓦型の見積をさせたり、或は大坂木津川新田造船所の技師長長曽雄憙氏は松山在住中長原が懇意であった処から、同伴訪問して瓦型の事など相談したり、或は此地方でも製造を試みる場合原料の都合は如何と海岸の砂の模様も調べなどして、長原は二月八日に出立帰鮮した。滞在中二月七日四郎と須磨の嶋田病院に薬剤師の細田作右衛門氏を訪ふた。氏は四郎と別懇の友で、将来共に一事事業起すと云ふ計画もあり、旁訪問した訳なので氏と共に海岸を逍遥し須磨寺公園を散歩し、点燈時に打出に帰った。須磨寺に敦盛首洗の水と云あり。傍らに「降雨も清水になるや花の奥」西風とあり。西風は尾張の人と云ふ。二月十三日は日曜である処から、英郎、四郎と圭二を伴ひ京都に遊ぶ。北野天神、金閣寺等に詣で大徳寺にて石田三成の墓を見るなど彼処此処散歩し、四郎が携行たる小写真器で処々撮影などして夕景に至り英郎等は帰り、予は三条白川橋の稲葉氏を訪ふた

処、是非との事に一宿し、同夜近傍に仏教法話があるとのことで、稲葉氏は佛教信者の処から同伴して法話を聴問した。先生と云はれる人は僧ではなく素人とのことであるに、頗る仏教に明るい人と見えて説教に敬服した。翌十四日予て序あらば訪ふべく思ふて居た高倉観崖画伯のことを稲葉氏に云と、近所であるから同伴するとのことで、大極殿前から東へ入る処の高倉氏を訪ふと、幸に在宅で久々に面会尓来の物語に時を移し、午餐の饗応があり絹本の波に旭日の画と陶器御本焼に氏が揮毫の菓子鉢とを恵まれて、午後二時卅七分発の汽車で大坂から電車に乗替て打出に帰った。同月十六日出立翌十七日無事帰宅した。逗留中苦楽園ラヂユーム温泉を始め大坂天王寺公園等に遊んだことは畧す。二月廿七日は亡父の十七回忌であるが、曽祖父の百回忌も本年である処から、旁四郎が帰って弔ふと云ので、夫には三谷村上の義兄本年喜寿の祝ひもあり、英郎夫婦等と同伴するとのことに、当日は上行寺で回向を頼み、本法事を延ばすことにして居た処から、三月十一日に英郎一行も着し四郎も帰ったので、百年忌と十七回忌を共に弔ひ、折節今治からお房も来て居て好都合に済ました。村上義兄の喜寿の祝宴は他人入らずで簡短に祝ふた。其祝詞に「喜寿の宴はるかに山も笑ひけり」。三月廿八日に大洲町長の足達儀国氏が突然来訪、曰く、故山本大参事五十年祭を行ひ其後贈位あり旁神楽山に建碑し卿を頌表するの挙あり。卿は当地に在勤の因もあり。建碑費寄付及犠牲奉公と題する詩歌俳句を募る事とせし。故に地方有志又は同好者に勧誘を嘱するとのことで、卿とは父と云ひ予も親しくせしものなれば快諾せり。其句に「雲と咲き雪と散りけり山さくら」。五月五日にてる、三郎、村上義兄同伴打出に向ひ出立した。［　省　略　］七月十九日予て近藤氏の周旋で七畝廿歩の畑を三畝廿歩篠崎、松根両氏に売渡しの登記を了した。同廿三日予て準備中であった三郎、カヤノ女并に金村氏と婚姻のシゲヨ女一行、新嘉坡へ渡航の為神戸に向ひ出立した。大正辛酉文月讃南の(三郎は讃南と号す)新嘉坡へ発足に臨み結果は将来にあるを思ふて「丹精は穂にあらはれて稲の花」。八

月十八日は誕生日で例年懇意の人を招き一酌するも頃日来南風強く蒸暑き天気なれば客を招くは追てのこととして家族団欒一酌を催し例に依て戯に「子等は皆遠くはなれてたよりなく貧しき身にも今日は生れぬ」「かくまてに老ぼれはてゝ甲斐もなしさりとて早く逝きたくもなし」。又剃髪して「花ちりて骨其まゝの逆かな」。同月廿三日三郎一行神戸を出船した。一行は打出村上に滞在して諸事支度を調へたのである。一行は九月七日着新の予定、一日後れ八日安着の報があった。九月十五日に十四日午前十一時奈津江分娩女子出生の報が達した。九月五日に陶柳坪老が逝き、同十九日近藤龍治郎氏、廿二日に山野又平老が永眠し、十一月四日に稱平社出火篠崎氏の宅が丸焼け、十二月十二日奥嶋芳五郎氏が亡くなった。十二月廿六日四郎が帰った。予て親友細田氏等と製薬事業の計画あり、既に加古病院は辞退して居り、近々岡山県宇野町に準備中の工場へ赴くと云ふ。又はるえは先頃来秋江から渡鮮のことを相談して来て一月早々に望月の許へ行筈にして居た処から、松本小学校退職出願中であったが廿六日付免職の辞令が達した。

大正十一年　渉　七十五歳

大正十一年一月一日郡中小学校の拝賀式に列し終て祝賀会にも列し、例の如く墓参、同二日試筆。勅題旭光照波「燦然たり太平洋の初日の出」「大海原波も笑ふて初日かな」。一月十三日岡山県児島郡宇野町大砂場に宇野化学工業所として製薬に従事することとなり、既に年末工場に移転し居たるより同地に向ひ出立した。二月十五日予て準備中であった渡鮮の為、はるえが村井じう女史と同伴出立した。三月三十日村上英郎一家族帰着当分同居することになった。斯は予て朝鮮望月製瓦事業を株式組織として村上が専ら経営の任にあたることとなり、為に家族は打出を引あげ同居するは我等が寂寞の生活よりも隔地の子女に

安緒せしめると云の趣意を含んだものである。英郎は四月五日朝鮮に向て出立した。四月二日去年陶柳坪氏死亡の後遺産処分のことより某親戚から故障起り居たるに、不幸にして相続者と定めたる武内氏の幼児死去し、遂に親族会を開くこととなり双方からの示談に応じて其会員となりたる行掛りより、相続人と定めたる武内氏親戚幼児惣平なる人の後見人を武内良蔵氏と定め、其監督人として当選の相談あり。老躯其任に非ずと拒辞せしも已むなき事情より承諾す。五月七日第二回郡中町敬老会を彩浜館に開く。参列九十才以上三、八十以上三十三、七十五以上四十五、計八十一名。「かのめぐみ朽る老木も若葉かな」。六月十一日てるを伴ひ朝鮮に出立す。予て秋江等から促し居たと大村つやが再び望月に勤めることとなり、同伴を勧めるなどより留守の心配もなければと思ひ立ったのである。十一日午後寄港の竜田川丸に乗八時四十分抜錨十二日午前六時門司着、九時対馬丸に移り十時卅分下ノ関発夜九時四十分釜山着、十一時発列車に乗十三日午前十時前竜山望月に安着す。七月に入りて雨天多く遂に十六日漢江増水旭内の防水堤塘工事中にありしより竜山橋端に土俵を積み防水の準備す。停車場迄の間舟を扱ふ。同月廿九日再び出水前日に比し大水となり、玄関診療室其他下の間は悉く器具を二階に運び畳を上げ浸水の用意をなす。同卅日鶏明に至り漸次増水鉄道構内に決水し時に大雷雨あり。警鐘を聞等非常の為に一同徹夜警戒し瓦工場及望月の社長なる倉庫

彩浜館

出典：『伊豫郡の花』(所蔵：愛媛県立図書館)

会社等へ焚出しする等混雑であったが同日午後から減水して幸に被害を見ず。併元町三四丁目には浸水家屋多く数日間其筋からの焚出しがあった。八月十八日七十六才の誕生日である処から望月一同と一酌して「蓮の実も飛んてのからの保ちけり」。八月廿三日村上は着以来屢々病気、且内地の事業調査を兼保養旁出立帰省す。朝鮮は雨の少ひ土地であるに七八月は雨天続き京釜間の汽車不通も屢々である処から、徒に滞在せるも九月に入て早々帰途に就くの考えであった処、着以来金剛山の探勝を勧め憲雄が学校の休業中に同伴せばと云ひ居たるも兎角雨の為に防[70]られ其侭に過ぎたのを秋江が遺憾として一部分なりとも同伴すると云出し、九月七日午後十一時五分発元山線列車にて出発、同八日午前六時五十分元山着連絡船統営丸に移り午後三時長箭着自動車で温井里に着したるは三時半で常盤旅館に投じ、翌九日九龍渕迄の絶景を見、十日萬物相の景勝を探り十一日午前七時元山線によって帰着した。金剛山探勝記は別にある。其間の出鱈目「温井里いて湯の窓の秋の山」「金剛門潜りし夢や秋の宿」「金剛山面河の友を偲ぶかな」「外金剛ここにも見たり寒霞渓」「金剛や狭霧にうかぶ玉女峰」「ヨボさんにひかれおされて金剛山金剛枝に尚もすがりつ」。九月十八日午前十一時頃漢江人道橋の辺りで鮮人が小鯨を捕獲して水産会社が夫を買取多数の見物人があるとのことを聞き、児等を伴ふて一見した。鯨は鮮人が二三人鯉を釣て居た処に此が流れて来たものと見て居ると牛ではないと誰彼れを呼び集めて菜刀よ網よと騒た末捕獲したものと云ふ。丈け十四尺位黒色のもので鯨に違ひない百円で買ふたのが千円に買手があるとのことであったが翌日から京城で公衆に縦覧さすことになった。漢江で鯨とは前代未聞と云ふ。左もあるべし。海岸を距る十里以上如何にして来りしものか或は過る大水の際迷ひて溯りしものならんと云。弥最早出立と定めた処、瓦事業に係る経営上に付協定の必要あれば其評議に立会の相談あり。為に又二三日を猶予中廿二日となりて望月末子の宏が下痢病を発して漸次悪症となり、廿六日には京城から小児専門医を迎へ同夜は食塩注射を施すと

70　正しくは「妨」

云ふ。重病なりて又出立の期を失ひ、看病中近藤氏からは長女婚姻式に是非列席し呉度との書状や電報がある。同月末に至り宏の容体稍軽快に趣きたると。十月五日となりて三津望月の老人が見舞の為に来着があったを幸に六月午後七時廿分発列車で翌七日午前六時過釜山に着す。恰も桟橋に景福丸の出舩を見たけれども、てるが汽車中不快を覚へ迚も其侭乗船する能はずと云ひ、予て一度は訪問の考もあり、旁中川平吉氏を訪ふこととし、西町なる清水氏を訪ふて中川の住所を聞、緑町一丁目の宅を訪ひ午餐の饗応の後、主人に誘はれて新設の公園松島に遊び、午後八時半出舩の新羅丸に乗り同八日前七時半下の関に着す。てるが船暈に苦しみ疲労しある等より九時半発の急行列車で広島に向ひ午後三時着、広電車で山下を訪ひ一宿翌九日前七時廿分の発車で吉浦に着共同丸に移り九時抜錨高浜に着したるは正午十二時、生憎汽車延着より帰宅せしは午後三時なりし。留守中帰り居たる四郎が高浜桟橋に出迎へ居たり。十月廿四日表家の為に新に汲井戸を掘り序に表の庭の石を門内と庭に据えた。十月卅日郡中小学校に学制頒布五十年記念教育勅語発付[71]当日を兼た挙式に列した。十一月六日夜から七日に渉り陸軍機動演習があって梢川堤近方等に大砲及機関銃の発射等あり。次て予讃の大演習に移った。其統監御序を以摂政宮殿下四国御巡州となり同月廿二日村上と四郎同伴衣山金刀比羅社下で殿下を迎へ奉った。然るに生憎海上が荒た為に三津浜御延着、従て四時頃は通過の予定が一時間余の後れとなり自動車は既に点燈し僅に御挙手の御影姿を拝し奉りしは群集と共に遺憾であった。同廿四日高浜御乗艦宇和島に向ひ御通航あり海岸に炬火を焚き煙火を掲げる。遥に拝送した。十一月廿六日松山高等学校に孔子二千四百祭(ママ)が行はれ留守中会員として申込置ありたるより参列した。服部宇之吉博士の講演があって、其終に臨んで東京の外全国に会員一千名以上は本県あるのみ、且県下先哲を併祠したのは全国にないと賞した記念書類がある。十二月廿五日細田氏来訪、製薬事業資金計画の為久しく四郎帰省中なりしに、稍く方針の目的を得たりとのことを告ぐるが為なり。氏は卅日

71　正しくは「発布」

出立帰岡した。同廿八日山下秀吉死すとの来電あり。突然のことなりしも四郎が出向て卅一日午後帰着した。秀吉は廿七日夜腰痛を発し絶脈迄僅に二十分医の診断心臓病と云ふ。十二月となって親戚の不幸。十四日に望月憲麿の実兄、十八日に従弟森茂太郎、廿六日従妹安井イチの次女珠子、翌廿七日山下秀吉、都合五人の訃音に接す。如斯より歳暮こじつけ左に「よくもなき年ははやくも戌てくれまた亥々としの来るとおもへば」。

大正十二年　渉　七十六歳

大正十二年一月一日半晴午前五時起床、村上一同と共に例の如く迎年。祝酒寒気と忌明未だ日残き等より終日戸外せず。同二日例に依て試筆。勅題暁山雲「よこ雲の帯あか〳〵と不二の山」「いつとてもうれしき屠蘇の包哉」。四郎製薬事業上の都合にて久しく徒然としてゐたるに、過日来細田氏の来りて相談の末、一応宇野工場に行事となりて二月十三日出立す。四月七日新年早々より松山に滞在の高倉観崖氏神戸新聞記者山本廣洋なる人と同伴彩浜館に来遊し居れば、宮内梅五郎氏と共に来よとの誘引に任せ同席一酌饗応あり。山本氏は慢画号を杢兵衛といゝ即坐と余の肖像を写すなど興を尽す。四月十一日四郎帰る。事業は不成功のものと認む。同十四日伊達邦太郎死亡の電話に接し四郎を遣す。同廿二日伊達葬式に付四郎を伴ひ訪ひ翌廿三日帰る。てる昨年朔鮮望月滞在中憲麿の診察上慢性胃臓炎との事にて以来服薬しゐたるに、五月十日頃に至り稍悪しく遂に臥床に至る。故に四郎同伴松山の本田氏の診察を請たるに、望月の処法の外意見なしとの事に、四郎が調剤して気長に療養する事にした。五月十五日藤井氏の診察も請ふた。五月十八日高倉氏の好意にて肖像画を持参し貰ふた。同廿二日東京から村上貞子、達子の姉妹がてる見舞

旁来る。六月九日てる看病旁はるえ朝鮮より帰る。六月十二日予て村上一家は適当の家あらば移転することに相談してゐた処、幸に下吾川分新町の元若林氏の家屋へ引越す事となり、生憎雨中を夕刻一同移る。予て三郎から七月には帰省して妻帯して九月中には又渡航の考であるとの報があって誰彼諸氏へ嫁の紹介を依頼して居た処、松山の東山磯男氏の周旋で元大洲藩故神山峰夫氏の長女知寿と縁談調ひ、六月廿八日四郎をして東山氏へ結納品を持たせた。縁女は東京で幼稚園の保姆学校に修業中にて来る九月卒業の筈であるから結婚しても必ず九月には出京して其卒業免状を請ける事を条件として契約したものである。尤も母なる人を始め家族は松山市在住である。七月十二日頃日来の大雨で諸所水害あり。高浜松山間も鉄道に故障があると云ふ。折柄三郎から紫丸で帰るとの電報が達したので四郎が寄港の汽船で高浜に出向き翌十三日三郎を伴ひ又汽船で帰着した。同廿日秋江からアスアサタカハマユクと電報が達し廿一日三郎、四郎同伴迎に行、母子一行七人と共に帰る。七月廿七日亡太郎の十七回忌を吊ふた。同卅一日三郎結婚式を基督教会で挙げた。冨田、東山両牧師の尽力で好都合に終りし。一応神山母堂と戸主克美氏、親戚加藤啓三郎氏夫婦、東山、二宮両氏夫婦と、当方は村上義兄を始め英郎夫妻、お房、秋江等宅に迎へて祝酒の後双方初対面の上挨拶をした。てるも病を押して列席した。夫より一同北京楼に移り藤村氏夫婦、近藤氏夫婦、同松枝女等を招き、隣家黒田氏、渡部義一郎氏等周旋で祝宴を開いた。其前三郎夫婦と別に一同との撮影もしたが、てるは病中で列するを得なんだ。八月四日仲田もゝよが死亡した。同十三日三郎が操と明を伴ふて高浜から厳島に参詣して翌十四日帰った。同十六日余の誕生を兼て喜寿を祝ふと云ふ事になって両村上、望月一行、お房折節来合た黒星松枝等で、他人は宮内六郎右衛門、同梅五郎両氏を迎へ、賑やかに一酒宴を開ててるも暫時列席した。但し、てる六十二歳の祝ひも共にするの趣意である。同廿日秋江一行に同伴して来た加藤清女加り、当港から大井川丸で門司に向って出立した。九月一日知寿が東京へ出立

宮内六郎右衛門氏
（所蔵：個人）

した。其夜東京から安井りうよが来た。処が同二日新聞号外で東京大地震から諸所に出火全滅の勢ひで焼つゝありとの事。次で知寿から名古屋発で汽車不通此地で見合すとの来電。直に東京大火直ぐ帰れと電報した。是は電信が名古屋迄は通じているが夫からが不通で、却て迷ふて居るではないかと思ふたからである。夫と行違いに又知寿から開通見込なしかへるとの電報が達して安心したが、安井の家族を始め村上、乃万等は如何になりしが問合すにも電信不通、且先方の居処安否も分らず只先方からの通信を待の外なく、りうよの心配同情に堪へず、同三日知寿から尾の道三時の船に乗との報ありて、春枝が高浜迄迎に行伴ふて帰る。同八日安井貞治氏が男子三人を伴ひ突然避難し来る。見るに堪へぬ泥だらけの服装で途中扶助されて稍くにして着したとて、子供の帽子やら下駄やら途中で貰ふたものである。何は扨置先着替をと、有合のものを出すやら、子供には幸奈津江が来合てゐて宅から取寄せるやらの混雑をした。同十一日予て三郎が渡航の時は次郎を伴ひ行度との望ありて前日四郎同伴岩倉病院を訪ひ主治医に就いて其事を内談した処、夫は至極宜しい、南洋へ転地して全治した例もあり、此節少しは意識も出来た様な場合であるから或は退院を促がしてもと思ふて居た処であるから、旅行免状の都合で如何様にも診断書は取計ふとの事であった処から全治の診断書を取寄せて居たので夫を添て警察署へ全快届を出した。関

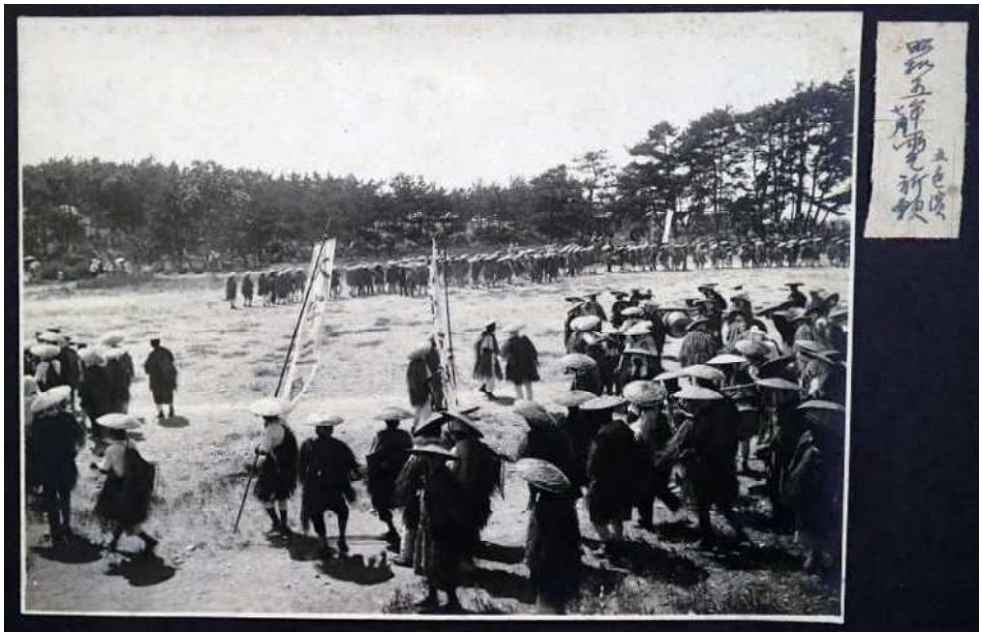
東の大震火災は前代未聞の事で焼失家屋やら死傷人の多ひ事は未曾有の災害、救護として一般に衣類を募り宅からも四五着を出した。安井氏へも衣類やら金若干を贈った。十月十七日三郎一行便船の都合で明日出立するとの事に、松山から神山母堂加藤氏東山諸氏を招き両村上、藤村等からも来り、離盃の小宴を催す。同十八日折節地方祭当日三郎神戸に向ひ出立、四郎は神戸迄村上と春枝は高浜迄見送る。同十九日予定の如く次郎は岩倉病院から神戸まで人を付けて送り来り。翌廿日出船のカナダ丸で無事に一行出発したとて廿一日四郎が帰った。航路は横浜、長崎、香港、サイゴンを経て十一月十日新嘉坡に寄港の筈、夫より汽車で小独立共和国ジョボール州コタテングに着するのである。同廿七日重松のてるの姉が死亡した。四郎が会葬した。十一月廿九日親友山田融翁逝く。丁度八十歳。十二月十四日町役場改築落成式に招かれ列席す。翌十五日七十五才以上の者饗応あり。是は本年敬老会を見合せて斯新築の役場楼上に催したるものである。同十七日三郎から十一月十一日付けで一行無事到着の報が達した。横浜、長崎、香港、サイゴンの各寄港地からもはがきを送ったのである。予て大坂の矢野定平氏の紹介で春枝を在東京の大野木昇一後妻にとの縁談あり。大野木は元廣嶋縣加茂郡三津町から出て大坂に在住。其昇一は二男にて東京に別居せしものとの事に、広嶋方面を調査せしに血統上何ら故障なく、且地方の旧家で筋の信用あり。呉市等の親戚皆上流との事に縁約しあり。十二月三十日矢野氏から結納品が着した。新年一月十一日に結婚式を大坂で挙げたいとの先方の望であるが迚も夫には都合がつかぬから二十日以後にして貰ひ度と交渉した。はるえの婚姻はあまり突飛な様なれば重複ながら左にしるす。大坂市南区八幡町の大野木友次郎氏と矢野貞平氏の関係は故山野又平氏の母と大野木家と関[73]があって矢野氏の妻は又平氏の女なるが故に、山野お房やら黒星松枝などゝ相談の末縁談進めたもので、大野木家の血統等は呉市に在住の三井與三郎氏に依頼して調べたのである。大野木昇一は東京市芝区白金三光町九十六番地に分家して居るのである。

73 かかわり

大正十三年　渉　七十七歳

大正十三年一月十七日に近方の親戚を招きはるえの送別小宴を催し、同十八日午後五時出立高浜に一泊し翌十九日午前八時出船の相生丸で尾の道に着し、汽車に乗替九時神戸駅に着し電車で住吉の森本に着した。一行は当人はるえと四郎と三人である。森本は松枝と政子同居である。同廿日はるえ、四郎は政子女同伴上坂し矢野氏と諸事協議し支度買物等して同夜森本に帰る。同廿一日は一行と松枝同伴神戸を見物し、廿二日はるえ、四郎、松枝同伴上坂二人は矢野氏に泊り四郎住吉に帰る。同廿三日四郎を伴ひ上坂矢野氏で諸事打合せ。一席饗応があって一行と松枝四人と矢野氏夫婦自動車で大野木本家に着し、午後九時滞なく結婚の式を挙げて十二時過三人は住吉に帰った。同廿四日は政子女の案内で大阪茶臼山雲水の精進料理に晩餐の饗応に逢ふた。途中三越楼上の池上秀畝の大作画高島屋の富岡鉄斎翁米[74]字記念画展覧を観た。同廿五日上坂矢野氏同伴大野木氏に招かれ一席の饗応があって同廿六日午後二時出立松枝と政子が神戸迄送って貰ふた。当日は皇太子殿下の御成婚祝日で諸方一般に種々の催しに賑ふた。神戸市の奉祝賑を見物して十一時発の汽車で尾の道に向ふ。同廿七日夜来より雪降午前五時尾の道に着し雪中を相生丸に移って五時卅分出船、雪の為に進行遅く午後二時前無難帰宅した。同年二月十一日紀元節に町役場の楼上で郡中町婦人会の発会式に列した。渡部明綱氏等の口演があった。余も炊事に係る節険談を試みた。同年三月六日望月憲雄が松山高等学校受験の為に来て同十七日迄滞在勉強したが合格せなんだ。同年五月十六日元山崎小学校(当地小学校の創始)同窓会に招かれた。余は直接の関係なきも当時の教員なりし坂内眞垣氏と共に入会した。同年五月卅一日から五日間皇太子殿下御成婚御祝宴を奉祝の為、一般装飾し屋台提灯行列其他仮装等稀なる賑ひであった。同年八月中旬頃から互楽会員中宮内六郎右衛門、同清一郎、同三郎

74　正しくは「米寿」



雨乞祈願
(所蔵：伊豫郡大谷池土地改良区)

の三氏と談合し、五色園隣地の郡中村大字米湊の山林二反二畝十四歩を山崎亀吉氏から買受の事を発起し、互楽会員一同の賛成を得互楽組合として共有する事となり、同地に建ある四畳半の亭を傍に移し其跡へ八畳と四畳床押入付の一亭を新築する事となり、余が図案によって九月十五日建築に着手し、十月十二日落成式として松山から手嶋石泉、鷲野舜楽、中神靄外、矢野翠鳳、藤田三友諸氏と当地滞在中の高倉観崖氏を招き、会員一同と共に煎茶一席の後酒宴に移り、書画の合作揮毫に夜更る迄快遊した。同年八月十八日例によって七十八の誕生を祝した。同日伊予郡元大洲領各村大字惣出の雨乞千人踊があった。其人数千四百余といふ。五色浜神社を巡り熱心に踊った。其夜細雨があった。誕生に「やっとまた苦熱をこせて今朝の秋」。

大正十四年　渉　七十八歳

大正十四年一月三日吉書初す勅題山色連天。「山の色もかはりて見ゆる初みそら」「牛の脊をかりて桜折章かな」。同年四月四郎大野木訪問、震災後の景況一見旁出京を思ひ立十日出立同二十四日帰宅す。同年五月十日小学校に於て大婚二十五年奉祝拝賀式に列し同日彩浜館の敬老会に招かる。参会者九十以上五人、八十以上二十七人、七十五以上四十五人、同日より三日間町内装飾諸賑ひ提灯及旗行列等ありたり。同月三十一日予て玉田豊治氏の紹介にて四郎婚約相談中なりし旧松山藩士天野忠敬氏長女恒子と丸万楼にて見合す。同七月十六日望月憲雄熊本第五高等校より帰途来る。同月十八日午後二時基督教会に於て四郎恒子と結婚式を挙ぐ。天野両親親戚総代芋田氏其他加藤啓三郎、戸井眞亞太諸氏、村上英郎夫婦、望月憲雄等列席す。式後披露宴を略し宅にて諸氏と一酌す。翌十九日天野老人忠純翁及主人女子村上一家等と互

楽亭に遊ぶ。同月廿日朝鮮竜山未曽有の洪水望月被害の報あり。同廿八日憲雄出発帰郷す。同八月十八日例に依て誕生を祝ふ。「行く雲のまたゆきつきすけふの秋」「梁りに帰り思案かつばくらめ」。同十月月列拉病流行す。全町一般ワクチン注射を行ふ。同十二月六日皇孫御降誕同十二日成子内親王と御命名あり。奉祝の為旗及灯提行列等にて市中賑ふ。

大正十五年(昭和元年)　渉　七十九歳

大正十五年一月一日(寅年寅日)試筆勅題河水清。「河底に松影にさしてとしあける」「元朝や金竜躍る河の面」「八十は来たり八声のとりの音に」。一月五日着、在南洋三郎より昨十二月二日午前十一時廿分次女生出[75]加壽と名命すとの報あり。二月二日着、朝鮮望月氏より一月十三日午前六時五十五分三女出生翠と名命[76]の報あり。三月七日村上氏患者診察室薬局雇医員住宅等増築落成式あり参列。てるも病中ながら人力車にて参向す。三月十六日宮内六郎右衛門翁の勧めにより郡中八景の拙咏成る。○谷上晩鐘「春の日も親しき友と団欒して谷上の山に入相のかね」「あのかねは早入相か花の宴」。○住吉松雨「時雨来てをとなふとてもましまさぬ神の戸たゝく松風の音」「神園や松を斜に時雨けり」。○萬安夜泊「とも綱をとく取交し繋舩心やすくも夢結ふらん」「明月やつなぐ舩にもすゝきみゆ」。○湊浦漁戸「童も翁も共に睦ましく賑ふ浦の漁りの頃」「秋風や浦家間近く鰯寄る」。○米湊の蛙声「蛙なく水田の面に月影の映りは春の姿なるらん」「雨あめとなくや水田の群蛙」。○紫海夕陽「筑紫かた遠くへだてゝ眺れば夕陽にうつる島影もなし」「日は入て空のかゞやく秋のうみ」。○稲荷翠嵐「初土の杜に生るゝすゝ風は水田の稲もの ひもこそすれ」「青田ふく嵐に霧の散りにけり」。○南山積雪「降つもる雪は海辺を辿りつゝ伊予の

75　正しくは「出生」
76　正しくは「命名」

制札

岬につゝく白砂」「日のさしてすか〳〵しさよ雪の山」。同月卅一日祖母五十四回忌を弔ふ。四月廿六日加藤泰通侯御一行大洲より御帰京の途彩浜館に於て御昼餐あり。海岸御散歩を幸に互楽亭にて小谷女史の手前の抹茶を呈す。侯御夫人数子の方、長男泰円公姫君大洲より随行、竹内海軍中将、力石祐一郎、井口正道、神山吉物、足立儀国諸氏松山より御迎として井上要氏等なり。終て郡中小学校に御立寄、大洲に因ある書画器物陳列あり。左に品を出す。月窓公和歌軸、泰恒公田植画賛の軸、同御手簡、郡中港図二枚、制札、大政官大洲県とあるもの、陶半窓詩(正二位公御巡領の際のもの)。翌廿七日松山明治楼にて歓迎会あり参列す。会員九十名余にて盛会であった。五月一日より作事に着手し、下座敷押入を玄関に改造、元玄関の間を居間とし、表門を北に寄せ物置を北に引き井戸場建替る等にて、同廿七日粗落成す。五月十五日彩浜館にて敬老会あり参列。九十以上三人、八十以上二十八人、七十五以上四十八人なりし。六月二日午后五時廿八分恒子分娩男児出生。同六日正と名命[77]す。六月十七日正二位加藤泰秋侯(八十二)相州國府津に於て薨死同廿日告別式通知あり。増福寺にて遙拝す。但自分のみ。七月七日大雨出水松山立花橋落ち出会人道破損す。八月四日前歯一枚を抜き同十四日入歯す。亀井歯科医同月十八日誕生。「夢うつつ八十年のとふの秋」。九月一日下痢病に罹り赤利[78]の疑あり。藤井氏の診療を請たるに幸に快方同九日全快。同十四日奥嶋かやの女南洋より帰省し来訪。三郎一家の無事を聞く。九月廿五日春枝来着。十月二日八十の誕生を祝う。互楽

77 正しくは「命名」

78 赤痢

亭四畳の室にて抹茶を饗し新築にて酒宴を催す。来賓加藤啓三郎、神山チカ、天野忠敬、伊達彦七、奥嶋カヤノ諸氏、松山より宮内六郎右衛門、宮内穣、宮内清一郎、村上敬忠、黒田彌市、村上英郎、近藤亀吉諸氏。但藤村氏は先方の都合ありて案内せず。小谷、武内良蔵氏は差支不参、翌三日互楽亭にて天野氏夫人、女子黒田氏、村上英郎一家内等を招き一酌。但近藤松枝女は不在、お秀女其他差支不参、十月廿五日春枝出立帰京す。同廿六日予て西園寺源透氏より明治四年大洲騒動の記伊予史談に掲載の為望あり、当時

豊川渉80歳のお祝い
（所蔵：個人）

互楽亭

の日記に依りて抜抄し送る。十一月二日より工事残り片庇薪置場等其他貸家修繕に着手し月末終る。同月四日奥嶋カヤノ松山に滞在の処母山野お房を伴ひ南洋に向って出立す。十二月廿五日午前一時二十五分聖上崩御あらせらる。同日昭和元年と改元。追記去る大正十二年在京都高倉観崖画伯来遊好意にて描き贈る処の画像あり。宮内六郎右衛門翁の紹介にて内山直枝氏の作文を乞ひたるもの天野純忠翁に揮毫を依頼し拙像軸とす。

昭和二年　渉　八十歳

昭和二年一月一日曇「卯のとしのうへうらゝかにうき〳〵と梅の上枝に鶯うたふ」。諒闇なれば回礼音もなく静かなる元旦なり。「民草も萎えて初日も曇かな」。三月十九日てる急にを発し藤井村瀬両医師診察。秋江春枝等に電報す。同廿五日秋江来着月末に至りてる稍快く一同安心す。四月三日高松と松山間鉄道開通式あり。同六日三郎三女出生加乃と命名すといふ。四月七日より発熱藤井氏の診断を乞う。中旬に至り漸次悪しく執筆を絶つ。同月下旬となるも毎日頭痛を発し苦痛に絶へず、加るに両眼共に視力稍□衰へ異常を覚ふも藤井氏意とせず。本病の癒るに従ひ全快すべしといふ。同月廿七日秋江来り。翌廿八日松山望月氏訪ひ病状を告げたるより、大祐氏夫を聞や、夫は通常の頭痛に非ず病眼なりとして、同氏雇の女医石田氏をして来診せしふるにより同伴せよとて、其日夜に入て秋江同伴して来り。診察し果して眼病なり、直に施術の必要ありとし、夜に入て施術に着手し、其全く終らさる頃より頭痛忽ち快方、右眼の施術を終り左は後日の事として終了す。夫より頭痛は覚へさるも尚服薬、是より前注射数度に及びたるも全く感覚なく、五月に入て稍く快く同月七日秋江出立帰途に就く。五月十四日松山博覧会閉場。同会中松山

『伊豫古美術品展覧會陳列目録』

城に於て史談会の催にて史蹟に羅る展覧会あり。西園寺源透氏の望に任せて八九点出品せしより開会中観覧を促され、前も楽居たるも病の為に遂に其意を得ず。六月四日正の誕生を祝う。(旧五月五日也)「頼母しき孫の育ちや菖蒲太刀」「音えつきをほこる端午の節会哉」。同五日町役場楼上にて敬老会あり。病後始めて戸外出席す。八月十八日例によって誕生を祝ふ。「平凡に八十一やけふの秋」。広島山下知也から昨年来毎度案内あるも、いつも行かず折角の事なればと四郎も勧めるにまかせ十一月七日四郎同伴高浜に出、渡航船に乗四郎帰る。山下知也同信一の両人宇品に迎へて南千田町の知也宅に入る。翌日より万花園饒津神社比治山公園に遊び厳島に渡り或は小舟にて宇品沖にはぜ釣等廿三日迄滞留し□散せり。十二月十四日広島より山下ゆう死去の報達す。

昭和三年　渉　八十一歳

昭和三年一月一日霰降。例により早朝家族団欒祝□す。「初日さす障子の梅に鳥の見ゆ」「元旦や翼は万事如是」「とし来り我等抑八十二」。同十三日奈津江来り。てるもいつもの如くきげんよく檮[79]につき箸を取て俄に痙攣を起し藤井氏の来診を乞秋江を始めしらせたるに秋江は妊娠の為来らず、春枝は一月廿日に来る。看病手を尽したるも終に二月九日午後六時十九分終に絶息す。同十二日火葬にす。「花を前に写

79　おそらく「榻につき」が正しい＝いすに座る

真のぬしは故人なり」「夜肩ふとん重ねて見ても寒さ哉」。四月二日午前十一時廿分四郎長女みち生る。同月七日憲雄来る。三津浜望月氏をあちこちと日を送り、八月となり渡鮮を勧めるにより、予ての普請も出来たる由に付かた〳〵思ひ立て八月六日に出立八日竜山望月に着きたり。望月の普請は竜山第一等の地を占め敷地は六百数十坪にて小山を均したるものなれば、第一等の地にて三がひあり、地下室もあり、其間取も広く建築祝ひの来客八十幾人なりしも一日に夫を済せたる程なり。

三．解説

豊川渉を語る上で重要な事は、「交友関係が幅広い」ということに尽きる。人間関係のみならず、明治期には地域に設立された各企業にも、直接的間接的に関わっている。若い頃はいろは丸に乗船し、坂本龍馬と交友を持ち、町長時代には政府の要職を務め、晩年には美作の鉱山事業に携わるなど、幅広く活動している。ここでは、明治四十年以降の豊川渉の足跡、交友関係について抜粋したい。

明治四十年頃は、豊川渉が郡中町の町長として活躍していた時期であるが、明治四十一年八月九日、大洲藩最後の藩主加藤泰秋の子、加藤泰通が墓参りのため大洲へ来た際、高浜で松山在住の大洲人と共に歓待した記述がある。伊予鉄道の井上要から、泰通に対する献盃を託されたと書かれている。加藤泰通は後の貴族院議員、井上要は伊予鉄道の三代目、五代目社長を務めた人物である。いずれも県内では広く認知されている人物であるが、その人物たちとも良好な関係を築いていたことが伺える。明治四十三年十月七日にも彩浜館で加藤泰通夫婦を饗応した記述がある。

町長の職務としては、政府の要職二人を歓待している。一人目は伊藤博文である。明治四十二年三月に伊藤博文が道後に来遊したが、同月二十七日に郡中彩浜館で歓待することとなった。生徒の体操や古書画等の陳列を披露するなどを行った。この際、抹茶茶碗二個と小徳利一個に揮毫し、ひとつは郡中町へ、ひとつは同行していた当時の安藤愛媛県知事へ、ひとつは江山焼の作者である槇江山に贈られている。また、この際、伊藤博文は、豊川渉らの希望に応じて、灘町の五色浜神社と湊町の湊神社の社号額の揮毫も行っている。

二人目は後藤新平である。明治四十三年十月、逓信大臣であった後藤新平が初代鉄道院総裁として四国を巡視することとなり、同

年十一月二十一日、中山で四国鉄道速成同盟会の伊予郡同盟会長として歓待した。同月十四日には町長の退職届を提出し、同月十七日には引継を終えていたものの、「公共事務の生涯の打留」と覚悟して後藤新平を迎えている。

前述のとおり、伊予鉄道社長の井上要など、経済界との関係も強くあったと思われる。退職前後には近藤亀吉という人物から美作国真庭郡勝山町(現在の岡山県真庭市)の名草鉱山で働かないかと誘いを受けている。近藤亀吉は「高須峰造氏と共同」で事業を始めているとのことであるが、この「高須峰造氏」は愛媛県越智郡(現在の今治市)出身で衆議院議員や愛媛新報の社長を務めた高須峰造と推測される。豊川渉は、明治維新後には酒小売や牛肉鍋店を営むなど、若い頃より商売に精を出しており、町長職に就く以前に勤めていた会社の内紛調停に従事するなど、様々な経験を積んでいる。大正三年十月には、星製薬会社と特約し、薬売業も始めている。

以上、抜粋ではあるが、豊川渉の交友関係等について列記した。これ以外にも思出之記に登場する人物や企業など、紹介しきれなかった固有名詞を、次項で列記することとしたい。豊川渉は、幕末、明治期の社会変革の中で、官職だけではなく、民間においても様々な経験を積んでいる。そこで得た厚い交友関係が、郡中の発展に寄与したのではないかと推測できる。

【思出之記に登場する事柄、人物、企業等】

窯業・鉱山・伊藤博文・マゼソン商会・カーシュー中尉・フォントロシコケ大尉・加藤泰通・井上要・伊予農業銀行・松山水力電気会社・八幡浜阪予運輸株式会社・伊予汽船会社・五色浜神社・海南新聞・陶惟貞・伊予水力電気会社・養老会・後藤逓信大臣(後藤新平)・近藤亀吉・名草鉱山・池田陶器・宮内六郎右衛門・星製薬会社・勝山藩・関東大震災

豊川渉の官吏履歴(1)

年齢	年　　代	事　　項
	弘化4年7月8日	誕生。
23	明治3年9月1日	**大洲藩民政庶務方になる。**
24	明治4年8月	大洲県民事庶務方になる。
	明治5年5月	大洲県廃止につき免職。
25	明治6年4月30日	愛媛県第19大区3少区副戸長になる。
26	明治7年5月	区画改正につき免職。
29	明治10年5月21日	愛媛県第15大区勧業係になる。
30	明治10年9月4日	内国勧業博覧会出品取り扱いのため出京の指令。
	明治11年1月24日	職務勉励につき手当金3円下賜。
31	明治11年10月30日	愛媛県第二課当分雇になる。 〔県第二課は勧業事務を担当〕
	明治11年11月21日	免職。
32	明治12年8月20日	酬労として金5円付与。
	明治12年10月15日	**伊予郡兼下浮穴郡書記に任命される。** (15等相当、月俸金8円支給)
	明治12年10月18日	庶務係になる。
	明治12年10月30日	免兼官。
	明治12年12月8日	出納係兼務になる。
	明治13年3月18日	14等相当月俸金10円支給。
	明治13年3月22日	勧業係衛生係兼務になる。
	明治13年5月22日	更に庶務係衛生係兼務になる。
33	明治13年12月22日	勧業係兼庶務係になる。
34	明治14年9月16日	伊予郡役所廃止、下浮穴伊予郡書記に再任される。 (14等相当)
	明治14年9月19日	勧業係兼地理係になる。
	明治15年5月12日	勧業係勤務になる。
35	明治15年8月12日	13等相当月俸金12円給与。
	明治15年12月23日	地籍編纂事務担当になる。
36	明治16年7月11日	官報取調事務担当になる。
37	明治18年1月6日	庶務係勤務になる。
	明治18年1月17日	兼ねて会計係勧業部勤務になる。
	明治18年6月12日	新道開鑿御用係勤務になる。
	明治18年6月24日	窮民救助に金6円を差し出し褒賞。

豊川渉の官吏履歴(2)

年齢	年　　代	事　　項
38	明治18年7月29日	12等相当月俸15円給与。
39	明治19年8月4日	官制改正、下浮穴伊予郡書記に再任される。(判任官9等に叙す)
	明治19年10月15日	郡第二科長、会計主務、第二科土木係になる。
	明治19年11月15日	窮民救助に金75錢を差し出し褒賞。
	明治20年1月27日	登記事務担当になる。
	明治20年2月26日	清潔法実施につき郡中支部委員になる。
40	明治21年1月4日	職務勉励につき賞金5円。
	明治21年4月10日	新道寄附金整理委員になる。
	明治21年7月1日	郡第三課長兼務になる。
41	明治21年7月17日	判任官8等に陞叙する。(月俸20円)
	明治21年7月23日	町村制度実施取調委員になる。
	明治22年6月20日	四国聯合新道開鑿に金16円を寄附し褒賞。
42	明治22年12月27日	職務勉励につき賞金5円。
	明治23年3月26日	郡第一課農商係兼務になる。
	明治23年3月27日	郡租税外収入主務になる。
43	明治24年2月26日	第4回関西聯合府県共進会出品事務委員になる。
	明治24年5月11日	郡中郵便電信局創業に金1円を寄附し褒賞。
44	明治24年11月25日	歳入歳出外現金収入官吏になる。
	明治25年4月22日	関西聯合府県共進会出品参観のため奈良県へ出張の指令。
47	明治27年11月13日	歳入歳出外現金収入官吏を免官。
48	明治29年6月22日	7級俸になる。
	明治29年7月1日	**依願免官**。

(愛媛県立図書館所蔵「官吏履歴」所収の履歴書2通により柚山俊夫作成)

「豊川渉の思出之記Ⅱ」主な出来事(明治42年～昭和5年)(1)

西暦	年　号	日　付	渉　の　記　録	頁	渉の年齢	世の中の動き
1907	明治40年			3	60	
1908	明治41年			7	61	
1909	明治42年	2月25日	天神社を住吉社に移し、合祀後は五色濱神社と称える渉の撰が同意される。	12	62	
		3月26日	伊藤博文を道後に迎える。彩濱館到着するが雪が降り出し、楼上から郡中小学生の体操を見学。風が強いので歓迎の辞を急遽、渉が代読することに。古書画等陳列、槇鹿蔵の庭焼きなど。名物の五色石を孫の土産にする。伊藤博文に五色濱神社と湊神社の社号の揮毫をもとめる。	13		
		4月25日	五色濱神社上棟式。渉が余興等の委員長となり大名行列、手踊り仮装など３日間賑わう。	16		
		5月25日	陶惟貞碑除幕式。渉の亡父堤が発起人。	19		
		5月28日	伊豫水力電気会社の点燈祝賀会。(松山公会堂)	19		
		10月26日	伊藤博文の満州ハルピンで暗殺弓外に驚く。	20		伊藤博文暗殺
1910	明治43年	3月13日	湊町鯨騒動。渉も沖合で見学。3/21山口の捕鯨会社が沖合で捕獲。翌日から見物会を開催。	24	63	
		6月19日	灘町の彩濱養老会を開催、出席者149人。	26		
		7月22日	増築中の郡中尋常小学校が落成。(11/26落成式)	26		韓国併合
		11月14日	豊川渉　町長退職届を提出。(8年9ヶ月間に助役更迭が7名。不祥事や病気死亡などに悩まされる)	27		
		11月21日	四国鉄道速成同盟伊予郡会長として後藤新平逓信大臣を大洲で歓迎。中山から郡中まで人力車35台。郡中駅から松山停車場へ。	28		
		12月7日	豊川渉町長在職慰労会、彩濱館に招待をうける。	29		
		12月11日	岡山県真庭郡勝山町の名草鉱山事業の監督を依頼され名草鉱山へ。これ以降鉱山事業に従事。	29		
1911	明治44年	10月18日	第6代藤谷豊城町長による港外海岸埋立事業の起工式・宴会に彩濱館に招かれる。	36	64	
1912	明治45年 大正元年	9月27日	朝鮮・馬山。11/4まで京城など旅行見学。	40	65	明治天皇崩御 大正元年改元

「豊川渉の思出之記Ⅱ」主な出来事(明治42年～昭和5年)(2)

西暦	年　号	日　付	渉　の　記　録	頁	渉の年齢	世の中の動き
1913	大正2年	6月15日	宮内六郎右衛門らと発起人となり半窓翁40年祭を彩濱館で開催。	42	66	
1914	大正3年			42	67	第一次世界大戦勃発
1915	大正4年	5月	五色濱神社の砂山に松や楓の移植工事。	44	68	
		12月20日	南町濱通りの梢川に大礼記念として「大正橋」開通式。渉が町長時代に明治天皇即位50年記念事業として企画。	48		
1916	大正5年	1月7日	恩人故国嶋六左衛門50年忌、大洲寿永寺の墓参。	48	69	
		1月8日	宮内六郎右衛門ら10名が「互楽会」を開催。	49		
1917	大正6年			50	70	ロシア革命
1918	大正7年			54	71	8月下旬スペインかぜ世界的大流行
		8月14日	郡中米騒動。湊町の湊神社に多数集結。	58		米騒動勃発
1919	大正8年			59	72	
1920	大正9年			60	73	国際連盟発足
1921	大正10年			64	74	
1922	大正11年			66	75	
1923	大正12年			70	76	関東大震災
1924	大正13年	9月15日	宮内六郎右衛門らと五色園隣地に「互楽亭」建築に着手し、10/12落成式。	76	77	
1925	大正14年	10月	コレラ病流行、全町一般ワクチン注射。	77	78	
1926	大正15年 昭和元年	3月16日	宮内六郎右衛門らの勧めで「郡中八景」を詠む。	77	79	
		10月2日	渉80才の誕生祝を「互楽亭」で開催。	78		
		12月25日		80		大正天皇崩御 昭和元年改元
1927	昭和2年			80	80	
1928	昭和3年	2月9日	妻てるが死去。	81	81	
		8月6日	朝鮮京城・竜山の望月家新築祝。	82		
1929	昭和4年				82	世界恐慌
1930	昭和5年	3月21日	豊川渉死去。(83才)		83	

(門田眞一作成)

参考文献

伊豫市史編纂委員会編　『伊豫市誌』　伊豫市　一九八六年
伊予市誌編さん会編　『伊予市誌』　伊予市　二〇〇五年
愛媛県史編さん委員会編　『愛媛県史・人物』　愛媛県　一九八九年
門田眞一　「豊川渉の思出之記」　伊予市歴史文化の会編集部編　『伊予市の歴史文化』第六十八号　二〇一四年　伊予市歴史文化の会
作道茂　「論究　豊川渉の『思出之記』についての考察」　伊予市歴史文化の会編集部編　『伊予市の歴史文化』第六十二号　二〇一〇年　伊予市歴史文化の会
作道茂　『豊川渉の思出之記を読む会　記録』
望月宏・篠原友恵編　『豊川渉の思出之記』　二〇一一年　創風社出版

『豊川渉の思出之記Ⅱ』発刊にあたって

『豊川渉の思出之記』を二〇一一年に発刊後、伊予市の皆様のご尽力により、後半を読み解いていただき、編集作業をしていただき、今ここに『豊川渉の思出之記Ⅱ』が完成したことを心からお慶び申し上げます。

『豊川渉の思出之記Ⅱ』については、父望月宏が一部読み解き、私も大筋は把握したものの、細かいところまでは読み解くことはできませんでした。「『思出之記』を読む会」記録によりますと、『豊川渉の思出之記Ⅱ』を読み解くのに、四年間三十二回の会合を重ねたそうです。はっきり言って、渉さんの字は読みにくいし、崩し方もいろいろ。「読む会」の皆様のご苦労は並大抵のものではなかったと思います。『豊川渉の思出之記』を発刊しました時、後半部分を付属ＣＤに収め添付しました。後半を読み解いていただきたいという思いでした。あるいは、読み解くまでいかなくても、渉さんの行動力・好奇心の凄さがわかる内容を感じていただけたらという思いでした。それが実現したことは、本当に嬉しいです。

『豊川渉の思出之記』の発刊後、豊川渉の子孫たちの繋がりが深められました。特に、津野宏さんのお宅で、見つかった思出之記の原本や豊川渉の写真の原板を拝見したことは、何よりの喜びでした。望月の従妹会では、福山市の鞆の浦に集まり、「いろは丸沈没事件」の真相について談義したこともありました。伊予市の村上家、松山市の永井家との交流も出来ましたことは、感謝にたえません。

幕末から明治・大正・昭和初期という激動の時代を歩んだ渉さんを思いつつ、日々を平安に過ごしていきたいと願っています。

篠原　友恵

編集を終えて

豊川渉の『思出之記』は、伊予市郡中の郷土史家のみならず、「いろは丸」事件の研究者からも重要な資料として注目を受けていましたが、長らく原本の所在が不明でありました。平成十九年に作道茂氏が、豊川渉の子孫である永井敏隆氏から『思出之記』のコピーを入手し、伊予市教育委員会へ持ち込んだことがきっかけとなり、郷土史家が中心となり、研究が進められてきました。

平成二十三年七月には同じく豊川渉の子孫である望月宏氏、篠原友恵氏が『豊川渉の思出之記』を創風社から出版し、豊川渉の業績が地域の方にも広く知られることとなりました。同年十一月には彩浜館にてシンポジウム「幕末から明治の激動期～郡中と豊川渉の足跡」が開催され、篠原氏も同シンポジウムに参加され、地域の中で豊川渉の業績を紐解きたいという機運が高まりました。そんな中、市民有志が集い、平成二十四年一月から「『思出之記』を読む会」を立ち上げ、平成二十五年三月まで全十回、豊川渉の足跡を研究しました。

その間、作道氏は親族等各方面に原本の所在をあたり、ついに平成二十七年九月、同じく子孫である津野宏氏により原本の所在が判明、同年十二月に津野氏から伊予市へ寄贈されました。原本は静岡県沼津市にある津野氏の自宅で大切に保管されていました。

原本の確認は、各報道で大きく取り上げられ、坂本龍馬の研究者である徳島大学名誉教授の渋谷雅之氏も、いろは丸事件の研究等に活用されました。平成二十九年六月には資料の重要性から、寄贈いただいた写真類と併せて伊予市指定文化財として指定されました。

平成二十九年以降、社会教育課と元課員が中心となり、柚山俊夫氏らの指導を受けながら、思出之記下巻(Ⅱ)の翻刻作業を進めることとなりました。翻刻作業の合間、「『思出之記』を読む会」が再開し、平成二十九年五月から令和二年三月まで全三十二回実施されました。その中で翻刻者と同会有志の意見交換を行い、翻刻の正確性を高めることができました。令和三年以降は本格的に柚山俊夫氏、門田眞一氏の指導を受けながら、原稿作成作業をすすめ、令和五年に解説や図版も含めた原稿が完成しました。柚山俊夫

氏、門田眞一氏、並びに同会有志に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本書はあくまで基礎研究成果の段階であります。本書を基礎として、今後さらに伊予市・郡中の歴史が紐解かれ、地域資源の発見、魅力発信に繋がることを期待します。

水木　崇行

伊予市史資料集第十号

伊予市指定文化財「豊川渉関係資料」

豊川渉の思出之記Ⅱ

令和六年三月三十一日

編集・発行　伊予市教育委員会
〒七九九-三一一三
愛媛県伊予市米湊八二〇番地
電　話　〇八九-九八二-一一一一（代表）

印　　刷　不二印刷株式会社
〒七九〇-〇〇五四
愛媛県松山市空港通二丁目一三番三〇号
電　話　〇八九-九七三-一二六六